第４課　信仰によって義とされる

【暗唱聖句】

「なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです」ローマ3:28

【今週のテーマ】

今週はローマ書の中心テーマである信仰による義認について学びます。

【日曜日・律法を実行すること】

「さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです」ローマ3:19，20

人間は自分勝手な都合の良いことを口にします。しかし、神様の裁きの座に立つとき、すべての人の口がふさがれるとパウロは言います。つまり、何も言えなくなるということです。それは義が示されている律法を何一つ守ることができないことが明らかとなるからです。だれ一人律法を守ることで神の前で義とされるほどのレベルに達しているものはなく、律法はただ自分が罪人であるという自覚しか生じさせないのです。

　パウロがここで律法というとき、それは十戒だけでなく、幅広い意味でのユダヤの制度全体を指しているのですが、現代の私たちはユダヤの制度とは関係がなく生きているので、律法という言葉は十戒を中心に考えることでしょう。しかし、いずれにせよ結果は同じです。律法は罪を取り除くことができないばかりか、なお一層罪が見えてくるようになるばかりです。神のご品性を前に、人間がいかに不十分な存在であるかが示されるばかりです。しかし、そのような自分自身の罪を自覚させることが律法の目的なのだとパウロは言います。だから、罪の自覚が生じるのは正しいことなのです。

問題は、罪の自覚がわたしたちをどこに導くかです。虫歯になれば、どれだけ歯を磨いても、痛み止めを飲んでも一時的には良くなっても、根本的には何一つ良くなっていません。虫歯を治療するためには歯医者さんに行くしかありません。同様に、罪が見えたときに、わたしたちはそれに対処する術を持っていないのです。罪の問題を解決するためには、イエス・キリストのもとに行くしかないのです。つまり、律法は罪を自覚し、罪の問題を解決したいと思っている人を、イエス・キリストに導くために与えられたのです。

【月曜日・神の義】

「ところが今や律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました」ローマ3:21

「律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです」（ローマ3:20）に続く言葉として、「ところが…」と、パウロは神の前で義とされることと律法との関係について新しい転換が起こったことを示します。すなわち「律法とは関係がなく、しかも律法によって立証される」形で「神の義」が示されたと言います。新しく示された義とは、神の義でした。私の義ではなく、神の義が、恵みによって与えられ、救いに招かれるようになったのです。この神の義は、イエス・キリストが人として罪なき生涯を送られる中で成し遂げてくださったもので、律法もそれを立証しています。つまり、キリストの生き方は律法と矛盾していなかった、律法を犯すことがなかったということです。そして、それによって得られた神の義が、信じるすべてのものに無償で与えられることになったのです。このことを信じることが信仰です。幼子のように単純に信じて、喜ぶことです。

「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません」ローマ3:22

神の義は、イエス・キリストを信じる者すべてに与えられるとはっきり書かれてあります。ここに何の差別もありません。ユダヤ人であろうと、異邦人であろうと、老若男女問わず、イエス・キリストのわたしたちのために成し遂げてくださった愛を疑うことなく信じれば、神の義が与えられるのです。

【火曜日・神の恵みにより】

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」ローマ3:24

信仰によって神の義をいただくことができるわけですが、では信仰とは何でしょう。わたしたちには、神の義を

いただけるほどの素晴らしい信仰者でしょうか。神の義をいただくには、どのくらいの信仰が必要なのでしょう

か。このようなことを考えると、きりがなくなってしまいます。それは信仰という自分の功績によって救いを得

ようとしているからです。それでは、行いという自分の功績によって救われようとするのと変わらなくなってし

まいます。ただ、功績が行いから信仰に変わっただけです。

　わたしたちの救いはそれが信仰であったとしても、わたしたちの功績にはよらないのです。では何によって救われるのでしょうか。それは「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより」与えられるのです。しかも「無償で」と付け加えられています。信仰はこの神の恵みをいただくために差し出す手のようなものです。

また、「神の恵みにより無償で義とされる」と書かれてありますが、ギリシャ語の「ディカイオー」を正確に訳すと「義と宣告する」「義とみなす」となります。つまり、義となるのではなく、本来、義ではなかったものが、義とみなされるということです。そして、イエス・キリストはその保証人となってくださいます。

さらに、義認は一瞬のうちに起こることとして表現されています。徐々に、少しずつ義とみなされていくのではなく、ある瞬間に、一瞬のうちに起こるのです。そして、クリスチャンにとっては、それはすでに行った過去のこととなります。そのため、信仰によってこれから「義とされる」のではなく、すでに「義とされた」（ローマ5:1）となるわけです。

　なお、義とされたクリスチャンが神様から離れてしまった場合、悔い改めと回心が必要となります。この場合、もう一度「義認」の神様の業が繰り返されることになります。アブラハムも一度子孫が星の数ほど増えることを神様から語られた

【水曜日・キリストの義】

「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」ローマ3:25

神様は御子イエス・キリストを「罪を償う供え物」にされたと書かれていります。これは旧約時代に聖所で行われたあらゆる贖いの行為を象徴しているという意味です。また、「罪を見逃して」という言葉が書かれています。これは「大目に見る」という意味の言葉です。わたしたちが犯した罪を、キリストの贖いによって大目に見てくださったということです。

　しかし、これは罪がどうでも良いといっているのではありません。もし、罪を軽く見ることができるのならば、キリストは十字架にかかる必要などありませんでした。神様はキリストが人間の罪を贖われようとされたとき、それを大目に見ようとはなさらなかったのです。しかし、そのキリストの贖いの業によって、わたしたち人間が犯す罪は大目に見てくださるのです。

「このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです」ローマ3:26，27

キリストの贖いを信じる信仰によって私たちは義と認められます。それゆえに、わたしたちには誇るべきものは何もないのです。それは取り除かれたとある通りです。

【木曜日・律法の行いによるのではなく】

「なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです」ローマ3:28

エレン・G・ホワイトは「信仰による義認」について、それは「人間の栄光を土にまみれさせ、神が人間のために人間自身の力ではできないことをしてくださることなのです」と言っています。神様の義をいただくことなしに救いはないという事実は、わたしたち人間が土くれにすぎない無力なものであることを痛感させます。そしてわたしたちを謙遜にさせます。信仰による義認は、ただキリストに頼るほかないという信仰の持つ価値の大きさについても、再確認させられます。

ただ、このみ言葉は律法を軽視するものではありません。律法を守ることによって誰一人義とはなりえないということを教えているだけです。逆に、信仰によって義とされた者は、律法の教えに喜んで従うことを願うようになるのです。